



Title	かくも不穏当なる喩え：殉教者バラバスと「マカバイ記」
Author(s)	竹本, 幸博
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 56, 101-122
Issue Date	2009-07-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/39032
Type	bulletin (article)
File Information	56-003.pdf



[Instructions for use](#)

かくも不穏当なる喩え

——殉教者バラバスと「マカバイ記」——

竹 本 幸 博

I

英国エリザベス朝劇作家クリストファー・マーロウ (Christopher Marlowe, 1564-93) の作品『マルタ島のユダヤ人』(*The Jew of Malta*, 1589) に以前から気にかかっていた奇妙な箇所がある。主人公バラバス (Barabas) とキリスト教徒のマサイアス (Mathias) とのやり取りの中で、旧約聖書外典の「マカバイ記」(*The Book of Maccabees*) の名が突然出てくる。ユダヤ人バラバスと話をしているのを母親に見咎められたマサイアスを助けるため、バラバスがその場を取り繕い、本を貸す算段をしていたと言い逃れると、マサイアスもバラバスに調子を合わせる。マサイアスが借りるつもりだったのが外典の「マカバイ記」の注釈本だったというのである。

Bar. As for the comment on the Maccabees,

I have it, sir, and 'tis at your command.

Math. Yes, madam, and my talk with him was but

About the borrowing of a book or two.

II.iii.156-59¹

バラ：「マカバイ記」の注釈書でしたね、手元に御座いますので、ご自由にお申し付けください。

マサ：そうなんですよ、母上、本を借りることで話をしていただけです。

一時しのぎ、とっさの思いつきの「マカバイ記」に何となく違和感を覚えるのは私だけだろうか。何故外典であって、馴染みのないこの書が唐突にここで言及されたのか。ルネサンス期、聖書外典である本書の評価が高かったこととか、ヨセフス (Flavius Josephus, A.D. 37-c. 98) の『ユダヤ古代史』(*Jewish Antiquities*) と併せ読まれていたのだという知識が紹介されることはあっても、何故藪から棒に「マカバイ記」なのかという (ひょっとしたら的外れかもしれない) 疑問に一步二歩踏み込んで答えた研究はあっただろうか。勿論、一般読者向けの解説はあり、例えば、ユダヤ人が異邦人の支配に雄々しく抵抗した物語である「マカバイ記」を主人公

バラバスは高く買っていたのだろう、との N. W. Bawcutt の説明² で満足する読者も多いであろうから、特にこの言及を取り上げた研究がなかったのもある意味ではうなずける。しかし、多くの聖書への言及がなされ、そのことごとくに‘含み’が感じられる、表面的な意味と裏の意味とが重層的に示されているこの作品において、そしてその‘裏’の意味、隠喩、暗喩が様々に論じられてきたこの『マルタ島のユダヤ人』のような作品解釈において、この聖書の言及に踏み込んだ研究がなかったことは不思議でもある。異邦人と雄々しく戦ったのはマカバイばかりではない。何故モーゼ、ヨシュア、ダビデではなく、マカバイなのか。少し考えをめぐらせば、幾つかの推論は浮かぶのではないか。例えば、外典は旧約聖書正典の後に載せられるので、新約部との間に挟まれる格好になる。その外典の中でも「マカバイ記」は 16 世紀の英語聖書、当時普及していたジュネーブ版英語聖書 (*The Geneva Bible*, 1560) では最後に記載されている書である。つまり、新約聖書に接触しており、頁を一枚めくると新約聖書になる。いわば、旧約と新約の接点、橋渡しの位置にあることが、舞台上のマルタ島でのユダヤ人とキリスト教徒の接触をはからずも象徴していると考えられるであろう。これは「マカバイ記」の‘形’だけからの仮説になるが、その内容、精神面、すなわち‘心’は何らかの影響を作品に及ぼしているのだろうか。本論ではこの疑問を出発点として、この「マカバイ記」へのたった一行の言及から辿れるものを探してみたい。

II

ユダヤ人に対して現代人は複雑な気持ちを抱いている。差別と抑圧、虐待、そして虐殺の歴史を経てきた彼らに対する憐れみの想い、傍観者としてのかすかな罪悪感すら覚えるかもしれない。このマーロウの作品に対しても、現代の我々が当時の観客にそんなデリカシーを想定するのは場違いと分かっている、あからさまな人種差別を目の当たりにすると、当時の観客にもいくばくかの憐憫や義憤を呼び起こさなかつたのだろうかと思ってしまう。それというのも、「マカバイ記」が言及されているのが、作品中でも最も露骨なユダヤ人蔑視の雰囲気の中であるからだ。マサイアスの母親は汚らわしいユダヤ人バラバスと言葉を交わした息子に吐き捨てるように言う、「話などしてはいけません、あれは天から見放された人間です」(Converse not with him; he is cast off from heaven. II.iii. 160)。そう言われた息子も表面上は調子を合わせ、「おい、いいか、ユダヤ人、本のことを忘れるなよ」(Sirrah Jew, remember the book. II.iii. 162) と高飛車に言い放つ。それに応えて、当のバラバスが、「忘れるなんてとんでもないこつてす」(Marry will I, sir. II.iii. 163) とへりくだった受け答えでこの短い場面は終わる。母親のあからさまな蔑視、話をただでで穢れるかのようにユダヤ人を毛嫌いする態度、また、天から見放された連中であるからして、交渉するだけでキリスト教への裏切りであるかのような口吻はキリスト教文化の中でとりわけ差別的と特筆すべきことでもなく、昔からの常套的ユダ

ヤ人非難のレトリックであったことは言うまでもない。しかし、「マカバイ記」の名が語られ、その書名が想起した意識の中では、違った意味合いを帯びてくるのではないだろうか。すなわち、劇の中では、バラバスの美しい娘アビゲイル (Abigail) の求婚者であったマサイアスは父親バラバスに頼みごとをしており、バラバスはよしなにはからうと色よい返事をしていたのだから、母親の手前傲慢に振舞ったのは全くの見せ掛けである。本作品中あからさまなユダヤ人蔑視発言は幾つもあるが、この母親の台詞はもっとも露骨なレベルに達している。そのような差別ムキ出しの母親とうわべだけとはいえ、ユダヤ人を見下したマサイアスの口から、「マカバイ記」を忘れるな、はい、忘れませんとのやりとりがあることに皮肉な意味が隠されている。

「マカバイ記」は第一と第二の書があるが、他の旧約の歴史書がバビロン捕囚以前のユダヤ人の建国の歴史を描いているのに対し、二つの書とも捕囚後の異民族 (シリア) による支配下、反乱を指揮したマカバイ一族の四十年ほどの歴史を取り上げている。両書とも同じ時期の歴史を扱っているのだが、著者やその視点の相違を始め、いろいろ違いが指摘されているが、聖書学の範疇に入ってしまうので、本論では都合上、また教会教父たちもそう呼んでいたように、引用の典拠を示すとき以外は両書を一緒にして「マカバイ記」と以後表記する。

「マカバイ記」にはユダヤ民族が迫害で苦しめられた悲惨な様子が詳述されている。シリアの暴君アンティオコス王 (Antiochus) はユダヤ人のギリシア化を進め、彼らの伝統的な宗教や律法に根ざした生活習慣を放棄させようと、安息日や割礼などを禁止し、破った者は女子供でも容赦なく処刑した (1 マカ 1: 60-1)。「マカバイ記」がこのようなユダヤ人の受難の物語であることを想起すれば、先のマサイアスとバラバスの会話は、征服民の圧政に苦しむユダヤ人という「マカバイ記」の記述をいみじくも舞台上で演じて見せていることに思い至るであろう。迫害者側である異教徒マサイアスが自分達の罪状を書き記した「マカバイ記」をユダヤ人バラバスに借りて読むという皮肉な展開、「マカバイ記」の何たるかも知らぬお人よしのマサイアスを陰で笑うバラバスの底意地の悪さすら感じ取れるのではないか。

「マカバイ記」と劇の描く状況が重なるのは一瞬であったとしても、この重なりには余韻と残像が後を引く。それほど「マカバイ記」と『マルタ島のユダヤ人』には主人公バラバスを巡る筋の展開や性格描写において共通するところが少なくない。例えば、ユダヤ人の反乱のきっかけとなった事件はマールウも同じ箇所を読んだと思うと、本作品の理解の上で考えさせられるところがある。その事件とは、ユダヤ人のヘレニズム化を強行し、改宗を迫る中、棄教を拒んだユダヤ人達が「悪の元凶」 (1 マカ 1: 10) アンティオコス王の軍に襲われる。多くのユダヤ人はモーゼの律法で定められた安息日を守って反撃も防御もせず (!)、隠れ家でなすところもなく妻子共々殺されてしまう (1 マカ 2: 38)。こんな愚かな原理主義派は結局何もしえず、結果として民族の拠り所であった神殿は異教徒に汚されてしまう (1 マカ 1: 21-5)。これに対して、むやみに律法を墨守する愚を踏まず、現実主義に頭を切り替え、安息日でも戦いを続ける決意を固め、神殿再興のため、そして、ユダヤ民族解放のため起ち上がったのがマカバイ

一族であった。マーロウが読んでいたと考えられるジュネーブ版英語聖書から引用すると、

Whosoever shal come to make battel with us upon the Sabbath daye,
We wil fight against him, that we dye not all, as our brethren that were
murthered in the secret places. 1Macc 2: 41³

だれであれ、安息日に我々に戦いを挑んでくるものがあれば、我々はこれと戦おう。
我々は、隠れ場で殺された同胞のような殺され方は決してしまい⁴。

新約聖書ではイエス・キリストが明確に律法のための律法を否定し、人々のために安息日(律法)があると唱え(マタ 12:8、マコ 2:27-8、ルカ 6:1-5)、信仰の優位を説いているのだが、それは後のことで、この時代は旧約聖書の時代であり、律法は厳守であった。であるから、一読すれば誰にでもこの安息日に拘束されず云々の条が旧約聖書の他の書と際立って異なる、否、まさに正反対の姿勢を示していることに気づくであろう。事実、歴史的に正確な記述を目指したこの「第一マカバイ記」の著者に較べて、より神学面を重視した伝統的律法派であった「第二マカバイ記」著者は前書のあからさまな律法違反を座視できず、苦しい言い訳で違反事実の解消を図った。曰く、実際のアンティオコス軍との戦いは安息日の前日で、日が暮れたのでマカバイ軍が追撃を諦めたことにより、結果として安息日は守られた(2マカ 8:26-7)!! この「第一マカバイ記」の安息日無視は神学的には伝統的律法絶対主義の衰退を反映しているのだが、行動理念の視点からは、教条主義の否定、現実主義の肯定という理念の劇的転換を象徴してもいるであろう。

そもそも旧約聖書は礼拝の指南書と言ってよく、特にモーゼ五書には、どのように自分という正しい神を崇拝するか、その手順を、よい例、悪い例をいろいろ示しながら、神自身が詳しく述べている。正しい崇拝の手順とは、すなわち神が定めた律法のことであり、律法を破った者は神に背くものであり、呪いや天罰が、それも子孫にまで及んで下されるのが普通である。旧約聖書の各書はユダヤ人が異邦人達と戦いながら国を切り開いてゆく歴史物語であり、エピソードとして多く挿入されているのは、この律法を破ったがために神の怒りを買ひ、(時として、悪意もない、ささいな違反なのに、訳のわからない程の) 厳しい仕打ちを受け、民族全体が異教徒の手に委ねられたりする⁵。「マカバイ記」に律法を堂々と破って罰も受けない(多分は認されている)ユダヤ人が登場するのは、たとえ、その行為が一時的なものにせよ、画期的であり、キリスト教に詳しい観客——もちろん、16世紀当時、聖職者養成を主たる任務としていたケンブリッジ大学、コーパス・クリスティ・コレッジで学んだマーロウもその一人である——にとっては瞠目に値する条であったことは疑いも無い。

このいわばリアリスト、反乱の指導者であるマカバイと呼ばれるユダ(1マカ 2:4)を描いた「第一マカバイ記」の著者については、安息日違反のような重大な神学無視を肯定的に記述

していることから、神学より歴史の正確さを求める傾向が見え隠れする⁶。その傾向のもう一つの例証として、「第一マカバイ記」には「神」(God)の呼称に「天」(Heaven)がたびたび使われること挙げられる。救いや感謝を「主」(the Lord)や「神」にではなく、「天」に求めたり、捧げたりすることが目立つ(1マカ3:19、50、4:10、24、40、9:46、12:15、16:3)。神学的に正統派で律法遵守の立場が顕著な「第二マカバイ記」にはこのような呼称は使われていない。ここで興味深いのはマーロウの描く登場人物バラバスにも神の名を呼ばず、「天」で済ます場合が多いことである。『タンバレイン大王』(*Tamburlain the Great*, 1587)や『フォースタス博士』(*Doctor Faustus*, 1588)にはよく使われていた「神」が、この作品になると何故か使われなくなる理由としては、みだりに神の名を使うことが検閲の対象になり削除されたのではとの推測もあるが⁷、前作との間が短いので決定的ではない。「第一マカバイ記」を読んでいるうちにマーロウが影響なり啓発されたと考えれば、「神」単独の使用はなく、宗教色の薄い脱宗教的な「天」が十六回も使われている理由としては有力であろう。宗教への傾倒の差が神の呼称に現れているとするなら、「第一マカバイ記」のユダ・マカバイの冷徹なりアリストぶりが一層印象的である。その姿勢を想い浮かべていると、マカバイが本作品冒頭に登場し、作品を貫くりアリスト哲学・理念を語るマキャベリ(Machevil—テキストのスペル)に重なって見えてくるのにそれほどの時間はかからないであろう。「人は表向きには私の本をけなすが」(Though some speaks openly against my books, Prologue 10)、その実、「裏では熟読玩味、おかげで教皇様におなりという仕儀」(Yet will they read me and thereby attain/ To Peter's chair... Prologue 11-2)とマキャベリは自分の本の功德を一くさり、続いて、宗教をこき下ろし、無神論者ぶりを発揮する。主人公バラバスがこれから実践するように、「宗教なぞは児戯、下らぬ迷信や信仰にふりまわされているだけだ、無知以外の何物でもない。そっちの方がよっぽど罪悪だ」(I count religion but a childish toy,/ And holds there is no sin but ignorance. Prologue 14-5)。続いての論点は真の権力とは何か、マキャベリの考えは律法墨守が助けにならないと違反に踏み切った時のユダ・マカバイの現実路線と通じるのではあるまいか。

Mach. Might first made kings, and laws were then most sure

When like the Draco's they were writ in blood.

Hence comes it that a strong-built citadel

Commands much more than letters can import:

Prologue 20-23

マキャ：最初の王は力で成り上がったのだ、法律も、ドラコ(アテネ)がしたように、血でつづられた時、一番強固になる。そんなわけで、文字で書かれた条文より、堅固な城砦の方がはるかに強力なのだ。

ところで、この二人、マカバイとマキャベリのことを並べて考えていると、マカバイ(Mac-

cabees)とマキャベリ (Machevil)、発音すると不思議に非常に似ていることに気が付く。最初の出だしの‘Ma’音はaeで同じであったはずであるし、マキャベリのスペルが確定していなかったのでは(現在はMachiavelli)、テキスト通りであれば、アクセントが今のようにヴェッリと後ろに来ず、「メッキャヴィル」となり、「メッカビーズ」のマカバイと同じ冒頭になるので更に混同しやすくなっていたはずである。

「マカバイ記」‘the Maccabees’とバラバスが言ったとき、観客の中にはこの外典書の名前を知っていた者ばかりではなかったであろう。ジュネーブ版聖書には載っているものの、外典であり、新教神学では評価が低いし、一般に馴染みがなかったはずである。そのため、徒弟だの職人だのは音だけから、冒頭に登場した‘Machevil’と‘Maccabees’とを混同したとも思われる⁸。バラバスが持っていたのは劇冒頭に登場した例の悪名高い(といってもマーロウを含め、実物を読んだ観客は殆どいなかったはず)無神論者マキャベリの本なのか、と。現にマキャベリはこれを読めば偉くなれるとか言って自分の本の自慢をしていたではないか(Prologue 11-2)。マキャベリはおまけに「我が信者」(he favours me. Prologue 35)とバラバスを呼んでいた。そうか、マサイアスに「マキャベリの本」を貸すのかと頭をよぎる。この‘誤解’は以後のバラバスがマキャベリの申し子のように神を恐れぬ悪企みに突き進むのを目の当たりにすることで確信に変わるだろう。Harry Levinはバラバスが観客に与えるイメージについて、前半の旧約聖書の世界が途中で後退して、代わりに『君主論』(Prince, 1513)の世界が前面に現れると述べているが、紛らわしい名前の取り違えをきっかけに舞台の雰囲気が一転することをはからずも言い当てている⁹。一方で、「マカバイ記」を認識できた教養人、更には、一步踏み込んで推測すれば、マーロウの微妙なひねりを加えた反体制的隠喩を楽しみに来ている「通」の観客にはバラバスが「マカバイ記」の描くユダヤ人の苦難に自分を重ね合わせていることが閃めく。マーロウは前作の『フォースタス博士』で反キリスト者フォースタス博士を表向きには正統的教理を踏まえて断罪しつつも、神学論義に一ひねり加えて、主役に相応しい威厳と哀訴の念をフォースタス博士に吹き込む離れ業を成し遂げている。同じような‘業’を期待した観客もいたであろうし、期待に応えようという気持ちもマーロウの側にあったであろう¹⁰。「マカバイ記」への言及は一方にマキャベリ=バラバスという勧善懲悪の‘公的な’展開を暗示すると同時に、他方に、マカバイ=バラバスという隠されたイメージのヒントを、否、その一貫した連想を観客に吹き込む仕掛けではなかったか。

III

安息日違反以外にも「マカバイ記」には旧約聖書の他書と比べて大きな違いがある。旧約聖書の各書がイスラエル建国の歴史を語っているのとは異なり、「マカバイ記」は建国後、シリアに征服され、ユダヤ民族の自覚や自尊心を失いつつある危急存亡のイスラエルを描いている。

国を失い、民族の誇りを傷つけられた苦難の民としてのユダヤ民族の姿がそこにある。これは正に近代に通じるユダヤ人の姿そのものである。そして、この姿こそ本作品での、マサイアスの母親に穢れた物のように扱われていたバラバスの姿そのものなのである。トルコに従属しているキリスト教国マルタ島のユダヤ人として二重の抑圧の下、島全体の債務返済のため、ユダヤ人であるだけの屁理屈でバラバスは全財産を没収されてしまう。しかし、バラバスは逆境をはね返し、キリスト教徒への復讐を目指す。ユダヤ人からすれば不当で理不尽でしかない仕打ちに立ち上がった被征服民という展開と「マカバイ記」との類似は明白で、それがため、マルタ島のユダヤ人バラバスとマカバイ一族のヒーロー、ユダ・マカバイとが不思議に妖しく重なってゆくのである。

更に、このイメージの重なりは「マカバイ記」が16世紀の神学でどのように理解されていたのかを検証することで更にはっきりしたものになって行く。「マカバイ記」には、アンティオコス王の圧政の中、多くのユダヤ人たちが脅しに屈し、背教者に墮した挙句、転じて為政者の協力者となって同胞に対する裏切り行為に及んだ経緯が詳しく書かれているのだが（1 マカ 1：43、9：23、2 マカ 1：7、3：4、4：10-6、5：23、11：21、14：3）、新教神学者ルター（Martin Luther, 1483-1546）はこの点に着目する。ルターはこの支配者である異教徒、迎合した裏切りユダヤ人、迫害に耐える正しい信仰を守るユダヤ人の三者に16世紀当時の宗教情勢を読み込んでゆく。すなわち、自分達新教徒陣営をマカバイ一族に率いられた信仰正しいユダヤ民族とみなし、敵対する旧教徒陣営を裏切り者のユダヤ人（the traitorous and the disloyal Jew¹¹）に重ねてゆく。かように新教徒陣営は異教徒と裏切り者のキリスト教徒（旧教徒）からの二重の迫害を受けている。しかし、主は正しい信仰に立つ者達（新教徒）を異教徒からはもちろん、裏切り者で不忠な旧教徒——これらの裏切り者達は、異教徒と手を組み、同胞の迫害、殺人に手を貸している（who had gone over to the Gentiles and were helping to persecute, kill, and torment their own people and brethren. 35: 351）——からも守ってくださる。ルターにとって「マカバイ記」の価値は対立する旧教徒を非難する根拠や正当性を与えてくれたこの「偽りの信仰者」の登場にあるとあって過言ではない（That is why the book is good for us Christians to read and to know. 35: 350）。

新教神学の一方の雄、カルビン（John Calvin, 1509-64）も同じ旧教徒との対立の構図を「マカバイ記」に見出してゆく。カルビンは「ダニエル書講解」の中で、「マカバイ記」に触れ、一部のユダヤ人が同胞を裏切ったことを取り上げて、悪魔が外の敵と「内なる敵」を使って攻撃を仕掛けたと述べている¹²。ルターと同じく、異教徒（外敵）とローマ教皇以下の旧教徒（内なる敵）と迫害されている自分達新教徒陣営という構図に拠っていることが分かるであろう。自然、「マカバイ記」に登場する裏切り者や偽善者の存在はカルビンの神学にとっても重要な意味を帯びてくる。カルビンは我々の中に多く存在するこれら偽善者、裏切り者による迫害、妨害はわずかの「選ばれた」「真の信仰者」にとって神の試練の必要で重要な一環であり、これらの試

練を通じて行われる‘純化’が選ばれた者とそうでない者をえり分ける神のなさり方であると論じている。自分が‘選ばれた’ことを認識するためには‘偽りの’遺棄された者達の存在が必要で、「マカバイ記」はその存在を指し示しているのである。

このように、新教神学の重要な二人の釈義において、多少の力点の違いはあるものの、「マカバイ記」が信者に対して持つ第一の意義は、他の事柄、記述を差し置いて、いずれも正しい信者を苦しめる同胞の背教者が登場することである。ルターもカルビンも、この「偽りの同胞」を真っ先に指弾している。ところで、「マカバイ記」を紐解いたであろうマーロウはこの「偽りのユダヤ人」という重要なモチーフをどのように受け止めたであろうか。作品に取り入れたであろうか。バラバスを裏切り、苦しめたユダヤ人同胞は登場するのであるか。ここで、すぐ思い出されるのは、作品中で、債務肩代わり命令に反発するバラバスを訪ねる三人のユダヤ人仲間のことである。この三人のユダヤ人たちと、バラバス、マルタ島総督ファーニーズ (Fernese) との間で繰り広げられる一幕二場のやりとりは正に旧約、新約聖書の引用、エコー、暗喩の展示会といってよい。そのため、何が中心的なモチーフなのかは多少分りにくくなっているが、一時的には「ヨブ記」(The Book of Job) の影響が明白であろう。しかし、全体の筋の展開と主人公バラバスの内面を辿って行くと、「マカバイ記」との一貫した類似が浮かび上がってくる。少なくとも、マーロウの人物造形の特徴として、聖書の人物をモデルにしている傾向を確認するため、以下見て行くことにする。

まず、「ヨブ記」の影響を確認すると、三人のユダヤ人同胞の名のうち二人が「ヨブ記」から取られているらしいこと (Zaareth はヨブ記のユダヤ人 Zophar から、Tmainte は同じく、Elipfaz the Temainte から)、さらに決定的なのは、全財産没収となって悲嘆に打ちひしがれるバラバスを慰める同胞が例としてヨブを挙げていることである。友人達も同じメッセージを繰り返しているし (O yet be patient, gentle Barabas. I.ii. 170)、ヨブの名にも触れている (Yet, brother Barabas, remember Job. I.ii. 181)。バラバスはそれを聞くと、自分の失った富に比べヨブの富は取るに足らぬと、一層焦燥を募らせ、ヨブの財産を一々挙げてみせる。曰く、羊七千頭、らくだ三千頭、牛二百くびき、雌ろば五百頭 (I.ii. 183-6) と、牛の数を間違えてはいるものの、正確に聖書の記述通りである。これはマーロウが聖書を引き寄せ見ながら書いたことを教えてくれる。友人が三人というのも「ヨブ記」からであるし、役割の点からも、慰め転じて返って苦しめるというのも英語の Job's comforter (慰めると見せかけて相手を一層苦しめる人) に残っている通りである。総督のファーニーズもバラバスに忍耐をすれば、必ず元通りの生活に戻れるのだと (Be patient, and thy riches will increase. I.ii. 123)、「ヨブ記」の中心的メッセージをそのまま繰り返している。

たしかに「ヨブ記」の伝統的、並びに通俗的理解はフランシス・ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) も『随筆集』(Essays, 1597) で触れているように¹³、‘Shall we receive good at the hand of God, and not receive evil?’ (伝統的な訳なら「神より幸いを受くるならば、災禍をも

亦受けざるを得んや」ヨブ2:10)と言って謙虚に耐えて、最後は元通りの富を授かったハッピー・エンディングの物語である。しかし、『貧者の聖書』(*Biblia Pauperum*)のような絵つきダイジェスト版聖書や説教壇からの間接的な知識ではなく、聖書を文字通り読むようになった宗教改革以後、「ヨブ記」の革新的な側面が人々の意識に上がり始めたと考えて不思議はない。現にそこにそう書かれているからだ。すなわち、第3章に入るとすぐに、ヨブは苦しみの中から、たとえ一時的にせよ絶望し、神の存在を否定したのだ。ヨブは生まれた日を呪い、日が暗くなること、雲が覆って日が差さないことを望む(ヨブ3:1-5)。マーロウはこの部分をバラバスの絶望の叫びにそっくりエコーさせているようだ。バラバスは全く同じことを同じ順番であげている。この瞬間、バラバスは日食のように最もヨブに重なりそして離れてゆく。自らをヨブに較べ、そして否定しているからだ。

Bar. So that not he, but I, may curse the day,
 Thy fatal birthday, forlorn Barabas,
 And henceforth wish for an eternal night,
 That clouds of darkness may enclose my flesh,
 And hide these extreme sorrows from mine eyes: I.ii. 192-96

バラ：あの不吉な誕生日を呪うにふさわしいのはヨブではなく、むしろこの俺のほうだ。
 見放されたバラバス！ これからは永遠の夜を願い、暗黒の雲がこの体を包み、
 この限りなき悲しみをこの目から隠してくれ。

マーロウが聖書本文からこの近代的な反抗者ヨブの姿を見出し、それをバラバスになぞったか否かについては想像の域を出ない。異端児にして無神論者の疑いのあったマーロウにその革命的認識の転換を求めるのは魅力的ではあるが、時代を超越しているかもしれない。「ヨブ記」からユダヤ人のヘブライ的なエキゾチックな表現やレトリックを借用したかもしれない。一時的にせよ、ヨブとバラバスの姿を重ねていたことは間違いが無い。しかし、ヨブのイメージに関しては、忍耐というイメージが中心であるはずだが、それをバラバスに一貫して追及する、つまりモチーフにまで高めたことではないようだ。その後の展開ではバラバスは復讐に転じているのであるから。一時的であれ、ヨブのイメージを通して前面に打ち出されているのは、むしろ、まっとうに生きてきた人間を突然襲う災難、「義人の苦難」という側面であろう。何の罪も犯していないのに、苦難にあったという不当さ、理不尽さという強い想いである。この側面は「ヨブ記」から「マカバイ記」のユダヤ人にそのまま受け継がれている。加えて、ルターやカルビンの講解にあった当時の認識である「マカバイ記」の同胞の裏切りに苦しむユダヤ人像という新たなイメージも加わって、「マカバイ記」で描かれているユダヤ人をバラバスの中に求めてゆくのより自然で無理が無いように思われる。友人達をキリスト教徒に屈服した裏切り

者として声を限りに非難するバラバスにはユダヤ民族の伝統と宗教を守ろうとする「マカバイ記」のユダヤ人の姿がより自然に、しっかりと重なるのではなかろうか。「ヨブ記」との関連にはないことで、従来の研究で見落とされがちだった重要な条項がユダヤ人達への命令書に挿入されているが、それは第二項目、「金を出さない者は、キリスト教に改宗のこと」という改宗命令である。これで仰天したユダヤ人たちは、続く三項目で、総て拒否するものは全財産没収と畳み掛けられ、あたふたと同意するが、一人バラバスの激しい非難の矛先は棄教命令を出したキリスト教徒ばかりに向けられているのではない。ユダヤ民族の自覚や誇りを忘れ、やすやすと屈した同胞にまずバラバスの怒りが向けられていることに「マカバイ記」を意識した上で注目したい。

Bar. O earth-mettled villains, and no Hebrews born!

And will you basely thus submit yourselves

To leave your goods to their arbitrament?

I.ii. 79-81

バラ：ええい、何という情けないクズどもだ、お前らはもうヘブライ人ではない。

勝手なお上のいいなりに、自分の財産をさし出すとは意気地なしにもほどがあるう！

「第二マカバイ記」は「第一マカバイ記」に比べ、ユダヤ人たちが受けた迫害が具体的に迫真的な筆で記述されているが、彼らにとって一番の苦しみは、強制的な改宗であり、まるで江戸時代のキリシタンの踏み絵のように棄教か死かを迫られる。律法で禁止されている豚肉を口に押し込まれた律法学士エレアザル (Eleazar) は寝返った同胞に食べるフリをすれば命が助かるからと勧められるが、拒否して信仰に殉ずる(2 マカ 6: 18-24)。同じように豚肉を拒んだ者で拷問の上、残酷に殺されたマカバイ七兄弟とその母のケースが列挙されている(2 マカ 7章)。彼らはキリスト教の伝統の中で、イエス・キリスト出現以前の殉教者として伝えられてきた(七兄弟殉教者の祝日は8月1日)。「第二マカバイ記」は反乱の指導者ユダ・マカバイの事績を一つの柱として、もう一つの柱はこのような棄教に対する抵抗とその迫害の中、ユダヤの伝統的信仰を全うして殉教した人々の記録、すなわち殉教者伝でもあり、そのため高く評価されてきたのである。その殉教の美学がバラバスにも一時的にこの場面で投影されているのではないだろうか。バラバスは総督ファーニーズから払わないのなら改宗だと脅迫されるが、言下に拒否する。これではもう信仰を奉じた殉教者の道か、ユダ・マカバイのように逆襲に打って出せない。

Fern. Why, Barabas, wilt thou be christened?

Bar. No, governor, I will not be convertite.

I.ii. 82-3

総督：それじゃ、キリスト教に改宗するんだな。

バラ：いいえ、総督閣下、改宗なぞしません。

異教徒の圧政の下、同胞の裏切りにも遭い、改宗を拒否して孤立無援となったバラバスは、ユダヤの民族の精神を守って背教より死を選んだ「マカバイ記」の英雄たちのように、栄えある殉教への道に決定的な一歩を踏み出しているのであろうか。

IV

ユダヤ人バラバスが直面した理不尽さは、自己の才覚で築き上げた財産を、ユダヤ人である、ユダヤの律法を守っているという、それだけの理由で没収されてしまう一点に集約できる。キリスト教徒側の正当化の論理もバラバスの反論もこの一点を巡って戦われる。ここにマーロウの大学才人としての非凡な才能を垣間見ることができよう。キリスト教徒側の論理が聖書の論理を切り貼りしてつなぎ合わせたものであることはこれまでの研究で明らかになっている¹⁴。総督ファーニーズの、多くの人々を救うためには一人の犠牲はやむを得ないという論理 (I.ii. 98-100) は「ヨハネ伝」11:50のエコーであり、また、ユダヤ人がイエスの処刑を望んだ父祖の罪のため、子孫にもその罪科が及ぶという連帯責任教理 (マタ 27:25-6) にのっとり、バラバスの不運を「先祖の罪」(thy inherent sin) だとする論法も新約・旧約聖書ともに馴染みの論法である。

First Knight. If your first curse fall heavy on thy head,

And make thee poor and scorned of all the world,

'Tis not our fault, but thy inherent sin.

I.ii. 108-10

騎士1：昔の呪いが祟って、汝らが貧しさあえぎ、世間からどんな侮りを受けようが、それは我らの責任ではない、汝らのご先祖様の罪のせいだ。

これに対するバラバスの反論も聖書に依っており、両者とも聖書にある論理を持ち出しているので、決着がつかない。そもそも聖書にはこのような矛盾する言説がいくらでもあり¹⁵、わざわざ、聖書の矛盾箇所を持ち出して、互いに応酬させているのとも思われる。結果的に、聖書の真理が相対化され、価値を減じ、貶められることにもなるが、このような手法は従来から無神論者マーロウの側面を強調する研究により指摘されてきたことである¹⁶。『フォースタス博士』での例が際立っているとしても、数の多さでは本作品が特筆に値する。両論の対峙の中でも一方の側の主張として特に説得力に富み、堂々たる正論となっているのが、親の罪が子に報いるという縁座的責任教理を唱えてユダヤ人全体の贖罪を要求する総督に対し、子に親の罪は

及ばずとする罪の個人責任に立つバラバスの主張である。依っているはずの「エゼキエル書」も併せて引用する。

Bar. But say the tribe that I descended of
Were all in general cast away for sin,
Shall I be tried by their transgression?
The man that dealeth righteously shall live:
And which of you can charge me otherwise? I.ii. 114-18

バラ：ご先祖様始めユダヤ人全体が罪のために天から見放されているとして、彼らの罪で私が裁かれなきゃいけないのですか。正しき行いをなすは生かされるとある。私を何の罪状で裁こうとおっしゃるのですか。

旧約聖書「エゼキエル書」18章、主の言葉が預言者エゼキエルに臨んだ、「先祖が酸いぶどうを食べれば、子孫の歯が浮く」（親の罪は子に報いる）という間違っただけの考えを口にしてはならないと、

because the sonne hathe excuted judgement & justice, & hathe kept all
my statutes, and done them, he shal surely live... the sonne shal not beare
the iniquitie of the father, nether shal the father beare the iniquitie of the sonne,
but the righteousnes of the righteous shal be upon him, and the wickednes
of the wicked shal be upon himself. Ezek18: 19-20

その子は正義と恵みの業を行い、わたしの掟をことごとく守り、行ったのだから、必ず生きる……子は父の罪を負わず、父もまた子の罪を負うことはない。正しい人の正しさはその人だけのものであり、悪人の悪もその人だけのものである。

罪の縁座責任否定は「申命記」24：16、「エレミヤ書」31：29-30にも記されている。聖書において、親の罪が子に及ぶか（縁座）、民族全体（連座）の連帯責任か、それとも個人責任なのかという問題は両論併記、つまり矛盾そのものである。基本的には旧約聖書の十戒で明言されているように（私を否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問う、出20：5）、主は妬み深い神であり、罪は民族全体が担う集団連帯責任である。こうなると、自分が全うに生活していても、罰を被ることになり、まじめに律法を守ってゆくことが馬鹿馬鹿しいという捨て鉢な態度を助長しかねないので、その矯正として、個人責任教理が打ち出されている。いずれにしろ、昔からの大きな矛盾点であることに変わりはない。マーロウの筆により、バラバスはこの矛盾を鋭く突く。そして最もふさわしい場面でそれがなされているものだから、いやおうな

しに浮かび上がるのは、ユダヤ人であることに対して加えられる理不尽な仕打ちの酷さである。彼の叫びにはやりきれない思いが込められている。劇の後の展開を踏まえた後知恵では、総督への恨みをその息子に晴らすので、バラバスの主張は口先だけといえるが、論理そのものが有する迫力、言い換えれば、正論の強さ、そして矛盾の内包する、解決しない、報われない悲痛さも呼び起こされている。

「マカバイ記」以前、旧約諸書では律法に背いたユダヤ民族は罰を受けた。しかし、今度は、律法を守ろうとしていることに対して迫害され、もがき苦しむ。旧来の正悪の概念がひっくり返った正反対の未知の状況であり、これが「マカバイ記」が描く新たな試練であり、近代に至るユダヤ人の苦難、すなわち、作中のバラバスらユダヤ人を取り巻いている理不尽な試練の始まりなのである。バラバスの苦難は父祖の因果応報ではなくとも、少なくとも国を失ったことにそのルーツがあり、辿ってゆけば再び「マカバイ記」に行き着く。バラバスの災難のルーツは「マカバイ記」の描くユダヤ人の歴史の中にある。

バラバスの苦難はさらに「マカバイ記」の神学にもそのルーツが見出される。「第二マカバイ記」には先に触れたように、殉教者が登場したが、彼ら信仰に殉じた義人には復活の希望が約束されている。殉教したマカバイ七兄弟は処刑を怖れない。何故なら永遠の命に蘇ることを確信しているからだ（世界の王は律法のために死ぬ我々を永遠の新しい命へとよみがえらせてくださるのだ。2 マカ 7：9）。自分の処刑を待っていた母親も息子達に復活の希望を語る（憐れみによってわたしは、お前を兄たちと共に、神様から戻していただけるでしょう。2 マカ 7：29）。新約聖書神学で明確に認識され、且つ強調される復活の教理が明確に打ち出されているのも「マカバイ記」の大きな特色である。復活の教理はイエス・キリストの復活で完成するが、それ以後、殉教の思想的基盤となる。そして、復活して救われるために殉教のような苦難が必要であり、イエス・キリストの苦しみを追体験することが堅信の証としても求められるようになるにはそれほど論理の飛躍は必要ない（あなたがたを試みるために身に降りかかる火のような試練を……驚き怪しんではなりません。むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。ペト 4：12-3）。もともと聖書には人々が救われるためには犠牲を前提とする思想があるが（彼の受けた傷によってわたしたちは癒された、イザ 53：4-5）、旧約聖書では救いの贖いは個人ではなくむしろユダヤ民族全体の苦難が必要と理解されてきた。ところが「マカバイ記」では殉教者（エレアザル、マカバイ七兄弟）のような個人の贖いによる復活や民族の救済が示唆されている。義人が苦難を受け、その犠牲によって民族が救われるという認識が窺える点で画期的であろう¹⁷。この救済思想を念頭に置けば、従来、マロウがバラバスをイエス・キリストになぞらえたとされている不敬な台詞も少し違った文脈で見直されなければならない。冒瀆的な暗喩としてばかりでなく、「マカバイ記」に表明されている義人による犠牲、すなわち信仰に殉じる道を指し示し、道慣らしをしているのではないか。

Fern. No, Jew, we take particularly thine

To save the ruin of a multitude:

And better one want for a common good

Than many perish for a private man.

I.ii. 97-100

総督：いいや、ユダヤ人よ、民衆の破滅を救うため、我らはお前のものだけを取り上げるのだ。一人のせいで多くが減びるより、公共の利益のために、一人が財を失うほうがよい。

義人の殉教と贖いの神学に基づいて、バラバスもキリスト教徒、同胞人を問わず、多くの民の犠牲となって財産を没収され、一人娘のアビゲイルをもキリスト教徒の側に奪われ、唯一の精神的支えと人間的な愛を失うことになる。富も愛も総て失うバラバスに改めて犠牲の子ヤギの姿が、イエス・キリスト以前の殉教者の姿が彼方に透けて見えるのではないか。

V

キリスト教徒からの迫害にあったバラバスが同胞からも裏切られ、聖書に依った‘正しい’論理により絶望の淵に追いやられる中で叫んだ言葉、「皆さんのご立派な正義は私の身にとつともない不正を及ぼしているのです」(Your extreme right does me exceeding wrong: I.ii. 154-5)は究極的な矛盾を的確に表現している。究極的な不正と究極的な正義が利那的に結びつくという逆説的表現である。この逆説的表現には単に矛盾を鋭く、巧みに描く詩的なレトリック以上の意味が読み取れると思われる。その理由は、このような対極にある二つの概念を一つに統合しようとする衝動といったものが、この作品中に満ちている、それがレトリックにばかりでなく、登場人物や、更には筋の展開にまで及んでいるからだ。

両極を結びつけるレトリックは一般に文学用語でコンシート conceit (奇想)と呼ばれ、17世紀の文学を特徴づける重要な表現形式であったが、18世紀になるとコーリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) やジョンソン博士 (Samuel Johnson, 1709-84) らによって非難され、美意識を失ってゆくことは文学史の語るところである。コンシートはダン (John Donne, 1571-1631) らの形而上詩人らの詩的美学を構成しているのであるが、形而上詩人を現代に蘇らせたエリオット (T. S. Eliot, 1888-1965) が同時に高い評価を与えた17世紀の説教師アンドリュース (Lancelot Andrews, 1555-1626) の説教にもその美意識が窺えるように、詩人にのみ限られるものではない。宗教的なコンシートは教会教父の時代から象徴的聖書解釈に発揮されてきた。特に、旧約聖書の中にイエス・キリストの事跡を読み取ってゆく予型論 (タイプロジー) として綿々と受け継がれてきた。16世紀の宗教改革により、聖書の予型論的解釈は新教神学の避けるところとなり、影響を幾分減じはした。例えば、ルターらの初期改革派に忠

実だった民衆派の説教師、ラティマー (Hugh Latimer, 1485-1555) には予型論への傾倒はない。だから、予型論に伴う美意識であるコンシートに訴えることもない。しかし、殊更ルターの例にならって、また、後にはカルビンの例にならい、平易な、時に殊更味気ない言葉使い、言い回しに固執する風潮が説教師、とくにピューリタンと呼ばれる急進改革派に見られる一方、論理や言語の着想と飛躍の妙に溢れた予型論的発想は有名な説教師だったアンドリューズを見る限り、依然として健在だったことが分かる。彼はよきサマリア人 (ルカ：10：30-7) が助けたのは荒野の蛇であり、ここにモーゼの青銅の蛇 (民 21：9、ヨハ 3：14) のイメージを重ね、予型論に依って聴衆にキリストの姿を呼び起こし、怪我をして倒れていたのは主イエスであると喝破し、聴衆に愛と慈しみの気持ちを求めている¹⁸。普通は倒れていたのが人間、助けたよきサマリア人がイエス・キリストとするのが伝統的解釈なのだが、そこを逆転したあっと驚く卓抜な着想に予型論の連想を加えて三段跳びし、見事に慈愛の美德 (Charity) に着地するこの冴えわたる想像力。この宗教的コンシート、予型論は代表的な教会教父のアウグスチヌス (St. Augustine) を始めとする教父の多くの聖書解釈を通して、結びつかない物を結びつける卓越した着眼と、想像の離れ業を生み出してきた。この詩的とも呼べる言葉と飛躍の魔術は普遍的で時代を超えて理解されうるものであるから、バラバスが飽くなき金銭欲に突き動かされ、叫ぶ言葉、「小部屋に収まる無限の宝」 (Infinite riches in a little room. I.i. 36-7) にアウグスチヌスばりの宗教的コンシートの見事な表現を感じ取ることができよう。事実、G. K. Hunter の研究により、この有限の小部屋と無限の宝という着想が聖母マリアの胎と救い主イエスを表現する伝統的キリスト教のコンシートであることが指摘されている¹⁹。強い感情、驚き、感動を表現しようとしたバラバスはしばしばこのようなコンシート、すなわち、逆説的な表現を用いる。マーロウの他の作品にも見られるが、この作品において特にそれが顕著に現れている。冒頭のマキャベリは自分に対する両極端の反応に触れ、「私を一番憎む者に高く買われているのだ」 (Admired am I of that hate me most: Prologue 9) と述べるが、賞賛と憎しみという両極の感情を呼び起こす自分、相矛盾するものが重なって存在している状態を体現している。

このような両極を同時存在、時には融合させる逆説的レトリックは実はキリスト教神学に特有のものではあろう。例えば、仏教では釈迦を実在の人物と理解しても仏教徒たる妨げにはならないが、キリスト教はそうではない。カテキズムではイエスは人にして神、聖母マリアは母にして乙女、イエス・キリストは子にして父という具合に、対立・矛盾するものを逆説的論理で超越し、受容させようとしている。いわば逆説が教理そのものになっている²⁰。人と神という本来矛盾するものを出発点としているキリスト教はこのような逆説的論理思考を育んできたとも言えよう。17世紀の宗教詩人クラッシュョー (Richard Crashaw, 1612-49) はこの宗教的コンシート、すなわち、矛盾とか対立するものを重ね合わせて、神秘的理解を訴える好例である。イエス生誕が呼び起こした歓喜を表現しようとして、すべてコンシートで、短い叫びとなっている。広大な意味の広がりや両極を指し示すことで表現している (日本語の大小、とか長短と

かのように)。感極まるとこのような表現に訴えるしかないのであろうか。

Welcome, all Wonders in one sight!
Eternity shutt in a span
Summer in Winter. Day in Night.
Heaven in earth, & God in Man.
Great little one! whose all embracing birth
Lifts earth to heaven, stoopes heav'n to earth.

*The Hymn*²¹

無限（全ての驚異、永遠）が有限（一目、一時）に押し込められていることを様々に歌い、相容れないもの（夏と冬、天と地、神と人）が融合、同時存在する神秘を語っている。この詩を念頭に置けば、バラバスの先に挙げた 'Infinite riches in a little room' も単に宗教的な比喩を借用したというのではなく、宗教的とも言える熱情が逆説的表現を取って現れたと理解するほうが深い奥行きを感じることができよう。更に、すべて失い絶望しているバラバスを指して、同胞のユダヤ人がこれ以上あれこれ言ってもバラバスの激情に油を注ぐばかりだと言う（Our words will but increase his ecstasy. I.ii. 211）。この 'ecstasy' という言葉は法悦という宗教的狂熱の含みが込められているし、宗教的激情にふさわしく、バラバスの思いは逆説となっただけで表現しきれない（Your extreme right does me exceeding wrong:）。ここでの「正義」と「悪」の二重写しには激しい感情が秘められていたのである。

正反対や両極を似通った点を捉えて重ねてしまう、マーロウのこのレトリックを念頭に置くと、更に多くのものが見えてくる。先に触れたように、リアリストで重なるマカバイ、マキャベリ、バラバスであるが、少し考えれば、不穏当な重なりであることにも気がつく。そもそも民族解放の英雄と無神論の巨魁マキャベリとを重ねて良いものか。ところで、マカバイとは綽名であって、正式の名前ではなく、ユダがその名である。後の背教者ユダと同じとは皮肉である。背教者に苦しめられた護教者ユダとイエスを売った背教者が同名とは……と考えてゆくと、マーロウにはこの手の不穏当なあてつけのような命名が少なくないことに思い至る。

福音書すべてに登場するバラバ (Barabbas) はユダヤ人の祖先の罪の象徴である。イエスカバラバかと問われたユダヤ人たちはバラバを救い、イエスを十字架へと追いやる（マタ 27：21、マコ 15：11、ルカ 22：18、ヨハ 18：40）。キリスト教徒にとって、ユダヤ人の罪のルーツはこの瞬間にあった。その反キリスト者の名バラバを主人公にそのままつけたことは、マーロウの底意についてさまざまな憶測を呼んできたが、単なる無神論者の悪意にとどまらず、イエス殺害に対するユダヤ人の連帯責任（マタ 27：25-6）を観客に想起させるための命名と見るべきであろう。

このような深刻で一瞬考えさせる暗喩の一方、観客を笑わす趣向のものもある。トルコ人の奴隸イサモア (Ithamore) が騙されているとも知らず、遊女ベラミラ (Bellamira) に愛を語るののであるがこれが、マーロウの有名な詩、The Passionate Shepherd のもじりになっている。締めくくりに、二人で過ごせば、「千夜も一夜に」(O, that ten thousand nights were put in one, IV.v. 140) と無限を有限に押し込める式のレトリックもバラバスの 'Infinite riches in a little room' のエクスタシーにならって、頭に完全に血が昇った様子で、これはとんだお笑いであるが、Bennet が編んだテキストの注には 'the dramatic impropriety'²² とあり、この場合の dramatic は「とんだ」で済むが、マーロウがこの作品中で繰り広げた様々なもじり、重ねあわせ、なぞり、隠喩、暗喩はすべて計算づくの「劇的で不穏当なる誤用」(dramatic impropriety) と呼んでおかしくない。細かな例は触れたが、別レベルの大きな重ね合わせがある。それは全体を通したバラバスの二重の姿である。

一つには、これまで取り上げて検証してきた、迫害に苦しむバラバスの姿、もう一つはここまで敢えて触れずにきた、金の亡者、嘘つきで、人殺し、最後に罪の報いを受ける悪玉バラバスの姿である。前者は堂々と、且つ、十分にユダヤ人の言い分を披露してきたバラバス、そしてその為、キリスト教徒の胸にいくばくかの驚きと、同情と、反発か、少なくとも多少の混乱を引き起こしただろうバラバスの姿である。後者は裏に回ると、自分の財産を守るためになら島の運命も、人命も一顧だにせず、手段を選ばずと言い放って (We ought to make bar of no policy. I.ii. 273) 冷酷な悪漢と化する人々の先入観に沿った悪魔の子孫のユダヤ人バラバスである。前者の主張に聖書の聖人ヨブやマカバイの姿を想い、同情の耳を傾けたりすると、すぐに不実な守銭奴の正体を現したバラバスに驚きと失望のパンチを食らう仕儀となる。

この二つの姿が時として、バラバスの性格の混乱と受け取られ、悲劇の迫力に水をさしたと思われてきた。一幕で順風満帆の冒険商人バラバスを襲う突然の財産没収とそれに果敢に反抗を試みるバラバスの勇姿(?)、とここまでは堂々のヒーローなのだが、二幕以降、キリスト教徒への復讐計画に着手し、親の罪は子にないと言っていたのに、総督への恨みを息子に晴らしたりして、それまでの堂々の主張や弁舌は嘘だらけで、ちゃっかり隠し財産で復活し、トルコ人奴隸の手下を使って、卑劣な手段で修道僧や修道尼を殺し、キリスト教徒とトルコ側双方を復讐のため、ペテンにかけようと打った大博打が外れて、自からの墓穴を掘るといふ、ドタバタに墮するという見方も根強い。マーロウが二幕以降、自分の作品への興味を失って、おざなりな作品展開になってしまったとか、とか、あるいはテキストに問題があるのかとも考えられた²³。たしかに、一、二幕で感じられた、美しい一人娘アビゲイルへの強い愛情は、自分の復讐を果たす邪魔になると分かると胡散霧消してしまうところは呆気ない。このような本作品への困惑は、かなりの程度、先に触れた、両極のイメージを重ねてゆくマーロウの表現の特徴に原因があると思われる。苦難のバラバスはヨブやユダ・マカバイのイメージでダブらせ、迫害の印象がより鮮明、かつ強烈に我々の心を打つ。しかし、いつのまにか、さっきの話は口先だけ

で、自分達だけが神の真の民で、あとは総て異教徒でカモになるために存在している「ふぬけの蛆虫野郎」(This gentle maggot... Must be deluded. II.iii. 307-08) でしかない。だから、この連中は騙しても罪にならぬと嘯く独善的な悪魔バラバスが今度は前面に打ち出されている。

Bar. It's no sin to deceive a Christian,
For they themselves hold it a principle,
Faith is not to be held with heretics:
But all are heretics that are not Jews: II.iii. 311-14

バラ：キリスト教徒を騙しても罪ではない、連中だって俺達には同じ主義だ。

異教徒相手に約束なんて守ることはない、ユダヤ人でない者はすべて外道さ。

「ユダヤ人でない者はすべて外道」のくぐりやまりはマーロウお得意のレトリックで²⁴、反対の立場から見ると思わぬ姿が浮かび上がる面白さを、少しの悪意と機知を込めて観客に投げつけている。キリスト教徒の目からは不実の異教徒にして稀代の悪漢、ユダヤ人の立場ならヨブのようにすら見えるという仕掛けである。この台詞の後の展開を見て、バラバスのこの両極の二面性はユダヤ人バラバスの中に同時存在している、不可分のものと受け取るべきだったと思知らされる。この二面は初めからバラバスの中にあっただけであり、苦難の徒も不実の異教徒も場面と状況に応じて、マーロウの筆により、主張のスペースや活躍の場を与えられて、我々観客の目の前に姿を現すのである。

二つの姿がかけ離れているので、一重に見ようとする、うろたえることはある。同じような困惑は聖書を読んでいるときにも起こる。それは誰の話なのか混乱させられる時だ。一番の原因は聖書時代の人物がしばしば二つの名前を持っているからである。綽名の場合(ユダと呼ばれるマカバイ)はまだよいが、完全に二つの名を持っている場合は混乱する。「使徒言行録」には「マルコと呼ばれていたヨハネ」(12:12)とあり、二つの名を持っていたことが分かる。例えば、使徒パウロはサウロ(Saul)とも呼ばれていた(使13:9)。ダヴィデを苦しめた悪王サウル(サムエル記上)と混乱を避けるためか、日本語では違う表記にしてある。しかし、英語は二人ともSaulで同じである。「使徒言行録」を読んでいると途中でサウロがパウロと入れ替わってしまうので慌てる。従来から日本語訳聖書では違う表記にしてあるのは、聖パウロと最後は自殺に追い込まれた悪王サウルと同じ名で呼ぶことを憚ったためもあるか、同じようなそれぞれ反発しあう二重のイメージを重ね合わせるマーロウの表現について論じてきたので興味深い。

改めて、注目したいのが、ユダヤ人バラバスは二つの属性を有していたことである。金銭という神(マモン)を崇拜し、犠牲を捧げ、信仰のためには自分の娘さえ省みない。宗教的熱情がこの面を描くときに表現されていることを感じ取りたい。富こそユダヤ人への福音だと一幕

で高らかに叫んだバラバス、ここに一つのトーン、一貫したイメージが提示されている。次の引用にマモンの殉教者としての歩みの第一歩を踏み出したバラバスの姿を感じる。

Bar. These are the blessings promised to the Jews,
 And herein was old Abraham's happiness. I.i. 104-05
 バラ：これらの富がユダヤ人に約束された神の祝福なのだ、
 そして、始祖アブラハムの喜びもここにあり。

その殉教者として経なければならぬ苦難として、トルコとキリスト教徒による迫害があった。宗教的イメージとその緊張感、劇的な高まりは、「ヨブ記」と「マカバイ記」への二重写しにより達成されている。「マカバイ記」の歴史はユダヤの神殿が汚されたことから始まる。そしてユダ・マカバイによる復讐と神殿の再建が歴史のクライマックスである。その過程で多数の異邦人達を無残に殺戮するが、目には目の同罪刑法に基づき、且つまた、神の祝福であるから実に誇らしげに、何万人何千人殺したと逐一記述がある（全部足すと軽く数十万人になる！）。『マルタ島のユダヤ人』の物語の発端も異教徒らにバラバスの黄金崇拜の神殿が汚されたことにあり、以後、バラバスは隠し財産と才覚により見事、黄金神殿再建を果たし、神殿を汚したキリスト教徒、トルコ人たちに徹底的な復讐を実行してゆく。しかし、最終的勝利がユダヤ人に与えられなかったように(B.C. 63、ローマにより征服)、バラバスも壮途半ばにして敗れ、最後は異教徒によって突き落とされる大釜の中、釜茹での無残な死を迎える。このおぞましい残酷さが殉教の聖者の死になんと相応しいことだろう。なにしろ、殉教としてのアピール度はただ首を刎ねられたり、刺し殺されたりでは迫力不足で、生皮を剥がれたり(St. Bartholomew)、腸を巻き取られたり(St. Erasmus)、馬で引っぱって四つ裂き(St. Hippolytus)、乳房をちょん切られたり(St. Agatha)、生きたまま皮膚を金櫛でズタズタ(St. Blaise)、熱した鉄格子であぶり焼き殺し(St. Laurence)、バラバスと同じ拷問としては、失敗はしたものの福音史家聖ヨハネの油釜茹で、そして、殉教の先駆者、マカバイ七兄弟もアンティオコス王によって「忍耐の限度を超えるほど熱せられた大鍋や大釜」²⁵(pannes and cauldrons, which were incontinently made hote. 2Macc 7:3)によって茹で殺し!! その残酷さと苦痛の程が重要な要素なのだ。沸騰する釜の中でのバラバスの呪いは短く、先に引用した宗教詩人クラッシュョーの歓喜の叫びのようなりズムと簡潔性に宗教的エクスタシーすら感じ取れる。

Bar. Dammed Christian dogs, and Turkish infidels!
 But now begins the extremity of heat
 To pinch me with intolerable pangs:

Die, life: fly, soul; tongue, curse thy fill and die!

V.v. 85-8

バラ：憎っつきキリスト教徒の犬畜生め、罰当たりなトルコ野郎、
うっと、暑さも半端じゃない、耐え難い痛みが俺を苛みはじめた。
死ね、命よ、行け、魂、舌よ、呪い尽くして、死ね！

ユダヤの拝金教に殉じた殉教者バラバスの意見と行動をマーロウはこの作品で描いた。マーロウは普段発言の機会もなく、一方的な先入観で胡散臭く見られていたユダヤ人に父祖の罪を背負うバラバスの名をつけ、大いに語り、活躍してもらうことを通じて、ユダヤ人から見たキリスト教徒の独善的な側面をそっとなぞったようでもあるのだが、最後はこれまた、ユダヤ人断罪の結末の一方、殉教とも見える二重写しの幕引きとしてある。マカバイ（メッカビーズ）とマキャベリ（メッキャヴィル）の違いも分からぬ観客の目には大釜で煮られたのは悪魔のバラバスなので、ヤンヤの喝采なのだが、たまたま教養と知識を持ち合わせた観客は拍手にかすかな躊躇があったのでは。何故なら、外典「マカバイ記」の色眼鏡越しに見るバラバスは不思議や殉教者のように見えるではないか。

注

- ¹ テキストは *The Jew of Malta*. Ed. N. W. Bawcutt. Manchester: Manchester UP, 1978 に拠る。
- ² 同上テキスト、114頁注参照。また、Bawcutt は同書 Introduction14頁でバラバスが仕組んだ騙し打ちの宴会（五幕）について、「第一マカバイ記」16：11-7の同じ手口に触れたり、16頁でもバラバスの釜茹でについて「第二マカバイ記」7：3でマカバイ七兄弟が鍋や釜で煮られる記述との類似を指摘しているが、単なる類似の指摘に留まっていて、それ以上の考察に踏み込んでいない。
- ³ *The Geneva Bible*, A facsimile of the 1560 edition. Madison: The Univ. of Wisconsin P, 1969.
- ⁴ 聖書の日本語訳は日本聖書協会編「聖書」新共同訳（1987年）に拠る。
- ⁵ 「申命記」28章参照。以後の「申命記歴史書」、すなわち「ヨシュア記」、「士師記」、「サムエル記上下」「列王記上下」は皆「申命記」の神学的見解に基づいて書かれたと思われている。なお、不思議な罰の例として、牛がよろめいたので落ちそうになった聖櫃をとっさに支えたウザを、主は打ち殺した（サム下6：6-7）。聖櫃に触れることが許されている部族（レビ人）の人間ではなかったからである。
- ⁶ フランシスコ会聖書研究所編『聖書：原文からの批判的口語訳』「マカバイ記、上下」昭和38年、に、現代の聖書学者の言葉として「歴史家はマカバイ記上に栄冠を与え……信心家はマカバイ記下を好む」とのコメントを挙げて、両書の特徴を対比している。
- ⁷ N. W. Bawcutt, Introduction, p.29、及び、p.54の注参照。
- ⁸ このような視点については、蒲池美鶴氏の『シェイクスピアのアナモルフォーズ』研究社、1999年、pp.43-57所収の論文、「ゆるやかに駆けよ夜の馬：『フォースタス博士』の観客達」に教えられた。従来の研究では主に教養ある通の観客を想定してマーロウの意図を云々していたが、蒲池論文はそれ以外の教養のない観客へもマーロウの意識が働いていたことを論じた。
- ⁹ Harry Levin, *Christopher Marlowe: the Overreacher*. London: Faber, 1961, p.96.
- ¹⁰ マーロウの作品の神学の言及を分析したハンターはマーロウの教義の引用の仕方から判断すると、引用の「控えられていた」部分を補って理解できる 'an ideal audience' がいたはずと述べている。G. K. Hunter, 'The theology of Marlowe's *The Jew of Malta*', in *Dramatic Identities and Cultural Tradition: Studies in Shakespeare and His Contemporaries*. Liverpool: Liverpool UP, 1978, pp.60-4 参照。
- ¹¹ Martin Luther, 'Preface to the First Book of Maccabees' (1533) in *Luther's Work*. Philadelphia: Fortress

P, 1960. Vol.35, p.351. 以後、同書からの引用は巻：頁で示す。

- ¹² John Calvin, *Commentaries on the Book of the Prophet Daniel*. Grand Rapids: Baker Book House, 1989. Vol.13, pp.330-31.
- ¹³ Francis Bacon, 'Essay IV, Of Revenge', *Essays*. London: Dent, 1972, p.13.
- ¹⁴ Paul H. Kocher, *Christopher Marlowe: A Study of His Thought, Learning, and Character*. 1946; rpt. New York: Russell, 1962. 並びに、R. M. Cornelius, *Christopher Marlowe's Use of the Bible*. New York: Peter Lang, 1984, pp.190-214., Sara M. Deats, 'Biblical Parody in Marlowe's *The Jew of Malta*: A Re-Examination', *Christianity and Literature* 37 (1988), 27-48, Ian McAdam, *The Irony of Identity: Self and Imagination in the Drama of Christopher Marlowe*. Newark: Univ. of Delaware P, 1999, pp.146-74.
- ¹⁵ 信仰と行為を巡るパウロ神学とヤコブ神学の違いをはじめ、この世の権威か神、どちらに従うかという問題が知られている。詩146：3、使5：29ではこの世の権威より神に従えとあり、ロマ13：1、1ペト2：13では権威に先に従えとある。
- ¹⁶ Kocher, *Christopher Marlowe*, pp.120-37.
- ¹⁷ フランシスコ会聖書研究所編『聖書：原文からの批判的口語訳』「マカバイ記、上下」p.31参照。
- ¹⁸ Lancelot Andrewes, 'Sermon of the Passion, Good Friday, 1604', in *The English Sermon: 1550-1650*, Ed. Martin Seymour-Smith. Cheshire: Carcanet P, 1976, p.304.
- ¹⁹ G. K. Hunter, 'The theology of Marlowe's *The Jew of Malta*', pp.75-80.
- ²⁰ Jaroslav Pelikan, *Mary Through the Centuries: Her Place in the History of Culture*. New Heaven: Yale UP, 1996, pp.51-2.
- ²¹ Richard Crashaw, *The Poems: English Latin and Greek of Richard Crashaw*. Ed. L. C. Martin. Oxford: Clarendon P, 1957, p.250.
- ²² *The Jew of Malta*, Ed. H. S. Bennet. New York: Gordian P, 1931. p.135 の注参照。
- ²³ 前半と後半部の差について批判的批評の流れを決定付けたのは F. P. Wilson であろう。以後、賛成するにしろ、多く出されるタイプがそうであるが、異論を唱えて、別の見方を提示するにしろ、F. P. Wilson の見解を先ず紹介することになった。F. P. Wilson, *Marlowe and Early Shakespeare*. Oxford: Clarendon P, 1953, pp. 63-5.
- ²⁴ Cf. *Doctor Faustus*, Ed. Irving Ribner, Indianapolis: Odyssey, 1966. 'All places shall be hell that is not heaven' (II.i. 124), 'And all is dross that is not Helena' (V.i. 105).
- ²⁵ この日本語訳は私訳。現代の聖書では旧教・新教ともに本文校訂の結果、「我慢できないほど熱せられた」の部分はない。

(原稿受理2008年11月14日、最終採択2009年3月27日)

《SUMMARY》

What a Dramatic Impropriety! —— Barabas the Martyr and The Book of Maccabees ——

Yukihiro TAKEMOTO

Biblical allusion in *The Jew of Malta* has been examined by a number of critics and their analysis has established not only Marlowe's familiarity with Scripture, but also his use of it as parody in the play. Given the amount of critical attention to Biblical reference, it is all the more striking that *The Book of Maccabees* to which Barabas alluded in the play has been critically neglected. For example, one reference to the Apocrypha book had a couple of functional elements in the play: it was meant to be recognized by the educated in the audience as a book about the plight of the Jew; it was also designed to associate Barabas with Jude Maccabee, the Jewish champion who liberated the Jew from the yoke of the Gentiles. The name, 'Maccabees' sounded familiar to even those who were ignorant of the Apocrypha book: they readily misheard the name, 'Maccabees' as 'Machiavelli' who had appeared in the Prologue of the play to claim Barabas as his own. The ironic juxtaposition of the godly champion with the notorious atheist and devil-figure suggests that Marlowe attempted something more daring than simply catering to the popular Anti-Semitism of the audience.

Taking advantage of the legacy of the symbolical reading of the Bible, Marlowe depicted Barabas in such a way that through an official Machiavellian villain an ideal and educated audience would discover a suppressed half: in other words, a hidden Barabas, that is a Jewish hero who ended up dying as a martyr. By invoking the name of Maccabees, Marlowe succeeded in writing a secret Maccabees' story between the lines of his official Machiavellian one. The death of Barabas, which was to be seen as religious retribution, could be identified with the martyrs' deaths of the seven Maccabee brothers who were also boiled to death in the cauldron just as Barabas was. The manner of his death was cruel enough to invite the audience, especially those who had been aware of *The Book of Maccabees* to sanctify Barabas as a martyr.